

尖頭器 大和市月見野遺跡 縮尺約1/1.5 明治大学考古学陳列館蔵

(川漁)の大きかったことが推測される。

少数の遺跡は、箱根山・湯河原町・小田原市・大磯町・鎌倉市・相模湖町・厚木市・横浜市・川崎市でも発見されている。これらの中で必ずしも川に沿っていない山中に見出されたものもある(箱根山朝日岳陵付近)が、一般的には川沿いに多い。

いづれにしても、県内では、立川ローム層が形成された三万年の昔、相模野台地を中心に、ほぼ県下全域に人間が生活していたことは疑いない。しかも彼らは、素手での生活の段階はすでに終えて、石を加工した道具(石器)を使っていた。獲物を打ち殺すためと思われる最も原始的な道具のチョッピングトウール、黒曜石やチャート・硅岩・頁岩・安山岩などの原石から剝離して作り出した剝片・石刃・石錐・ナイフ型石器・削器・搔器などがある。その大部分は、獣や魚類の皮を剥がし、肉を切りとる道具である。また石錐や、有舌尖頭器と名づけられている石器は、獣や魚を突き殺す銛や時には投げ槍の先につ

けられたものであろう。

一万年以上つづいた先土器の時代
もちろんこうした各種の石器が、同時に多発したわけではない。先土器時代は少くとも、一〜二万年はつづいたのであるから、その間に石器にも発達がある。その発達は、大きく

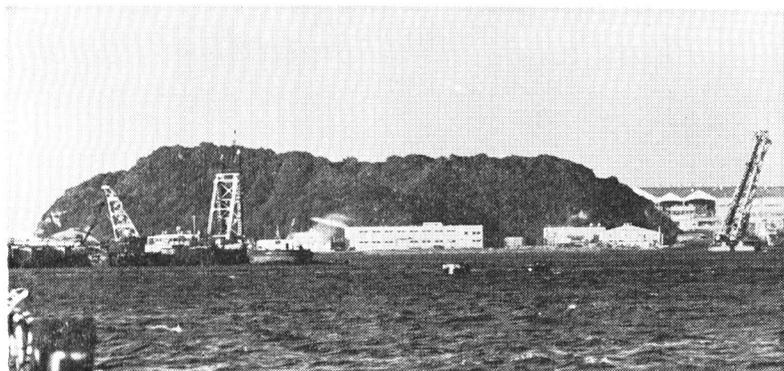
三期に分けられる。

第一期は、ナイフ形石器が盛んになる以前で、約三万年前にさかのぼる。

第二期は、各種のナイフ形石器の盛んになる時期で、約二万年前。

第三期は、ナイフ形石器がおとろえ、細石刃の普及した時期で、およそ一万三千年前。

このうち、県下の先土器時代は、第二・第三の段階に属すると推定されている。この時期でもまだ石鏃せきせきはあられず、せいぜい突槍か投げ槍で獲物をしとめる生活であったが、しかし、相模原市丁五号遺跡や横浜市神奈川区とうせんじ東泉寺遺跡・相模原市塩田遺跡しおだなどでは、多数の拳大こぶしの礫れきを並べた遺構が発見された。この礫は、そこの河原にある礫を用いており、こうした遺構を礫群れきぐんという。そこには火が焚たかれた痕跡こんせきがあり、付近に木炭片さえ見られるので、先土器時代人が、火の使用を知ったことと、火で石を焼いて食物の調理に利用したことが推定される。例えば、獣の腹をさいて内臓をとり出し、焼いた礫をつめて土中にしばらく埋めておくと、ほどよい蒸し焼きが出来るし、魚やイモなどを大きな木の葉にくるんで、焼け石とともに埋めて蒸し焼きにする、というよう
な、今日でも世界の一部でみられる調理法がすでに始まっていたとみてよいであろう。この火の使用は、さらに



横須賀市 遠景の夏島の埋立て前

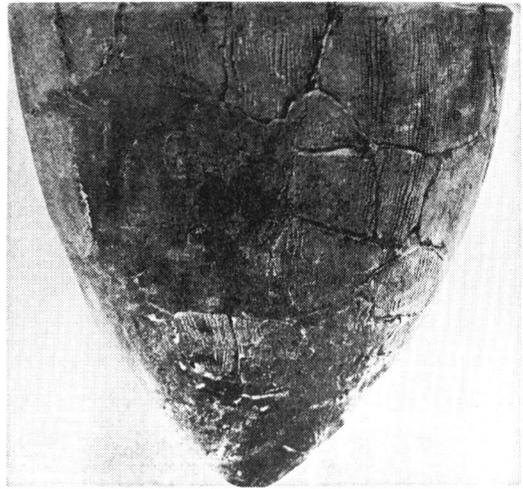
土器の製作につながる。

土器と弓

矢の出現

先土器時代を覆っていた寒冷な氷河期の最盛期には、海水は凍って百四十メートルほど海面は下がったといわれる。その時期には、日本列島は、アジア大陸とも陸続きとなり、ナウマンゾウやオオツノジカなどの巨大動物が山野に横行し、先土器時代人の狩猟のよい対象となった。

だが、この氷河期も終わり、氷河は融けて海面が上昇し、地続きであった列島が、海上に連なる列島となると、寒冷な環境に生きる巨大動物は北方へ去り、先土器時代人の生活も大きく変化する。それを示すものは、生活の道具に、土器と弓矢が加わったことである。この二つの道具は、ほぼときを同じくして出現したが、それが列島内で作り出されたものか、あるいは他地域から伝えられたものかについて、まだ断定の段階ではないとされている。ただ原初的な土器は、深い鉢形で、底が土につきさすように尖った形をしている。これは、シベリア方面で発見される土器の形と共通していることが指摘されている。はじめは土器の表面に撚糸をこらしたよ



夏島出土の尖底鉢形土器 高さ25cm 横須賀市

て、世界の学界をおどろかせた。

しかし今日では、横浜市南区大丸^{だいまる}出土の土器がさらに古く、県下最古とされている。県下の土器は、一万年前にさかのぼるといえる。それは、同時に縄文時代のはじまりでもある。

初期縄文時代を示す燃糸文土器^{もやいともん}の遺跡は、夏島貝塚や横浜市金沢区野島貝塚、横須賀市猿島遺跡のように孤島にも存在するが、海に面した台地上にあるものが多い。河川の流域にあるものは、川にむけて張り出した台地の

うな文様と土器の口辺に細い粘土紐^{ひも}をめぐらした隆線文^{りゅうせんもん}があるものが、のちには縄をころがした縄文と、粘土で複雑な飾りを施したものが一般化して、縄文土器^{じょうもん}と汎称^{はんしやう}される。この土器の出現は、先土器時代の第Ⅲ期につづくのであるが、一九五七年、横須賀市夏島遺跡から出土した土器は、同時に出土した木炭と貝殻(カキ)をアメリカのミシガン大学に依頼して放射性炭素を測定したところ、貝殻は、九四五〇±四〇〇年前、木炭は九二四〇±五〇〇年前という数値が出た。東京湾の現在のカキの貝殻の測定を同時に依頼したが、それは〇年前^{ぜろ}という数値であったので、この測定の信憑度^{しんぴやうど}は高く、世界最古の土器とし

先端部や縁辺部、丘陵地では、山頂にあたる部分や屋根にあたる部分にあるのが特徴である。

竪穴住居の時代

さらに先土器時代にみられなかった竪穴住居跡が見出される。それは横浜市港北ニュータウン内の遺跡、大和市下鶴間浅間社遺跡などである。これらの住居跡は、ローム層を浅く掘り込み、屋根や壁を支える柱穴があり、床面中央に方形の浅い凹みがあるが、内部に炉跡はない。一辺は五、六センチ前後が多い。こうした住居跡は、一戸から三戸くらいが同時に存在している。小規模な集落のはしりである。

こうした住居跡は、人々が、ある程度の期間定住をはじめたことを物語る。前の時代には見られなかった貝殻の堆積した貝塚がひろくみられるようになったことも、それを示している。夏島遺跡は、大形のマガキが厚い層をなしているので夏島貝塚とよばれ、横須賀市若松町平坂貝塚は、ハイガイ・オキシジミ・オオノガイ・アサリ・カガミガイ・スガイ・ウミニナ・ツメタガイ・レイシ・アカニシなど、二枚貝十六種、巻貝十六種が、ほとんど細く碎かれずに堆積されている。土器の発明によって、貝をうで中身をとる調理法が可能であったからにちがいない。土器の発明は、新しい食料分野への開発にもつながる。

貝塚には、貝類の外にも、動物や魚類の骨類も多く見出される。夏島貝塚では、イノシシ・タヌキ・ノウサギ・ムササビ・ニホンジカ・アナグマなどの獣骨、キジ・ヨシガモ・ガン・マガモなどの鳥骨、マグロ・ボラ・クロダイ・スズキ・コチ・ハモ・カツオ・メバル・アカエイ・マダイ・ブリ・サバ・ソウダカツオ・ヒラメなど、内洋性、外洋性の魚骨がある。

行動の迅速な小獣や、空とぶ鳥類は、突き槍や投げ槍では、もはや間に合わない。これらを食料にすることのできた背景には、飛び道具の発明がなければならない。夏島遺跡からは、少数の石鏃や骨鏃が見出されたが、横浜市緑区川和町の花見山遺跡からは、約二百点の石器が出土し、石鏃や、石鏃として使用されたと思われる有舌尖頭器が多数含まれていた。

夏島貝塚や平坂貝塚から犬の骨が出土し、これらにつづく時期の横浜市菊名貝塚からは、二十頭をこえる犬の骨が発見されている。これらは明らかに猟犬として飼われたもので、一戸一匹程度の割合で飼われていたと推測される。猟犬の存在は、弓矢が人間相互の戦いのために発案されたものでないことを暗示する。

集落の発展

横浜市港北区南山田町にある南堀貝塚（たほり）では、およそ三十五メートルの高さの平坦な台地上に、四十八戸の竪穴住居跡が発掘された。その多くが相互に重複しているので、四十八戸が同時に存在したのではなく、出土する土器などから、数戸の集落から始まって、のちには十戸位の集落が形成され、それが重複したものと推定されている。その期間は、これまた土器の形式から三百年くらいの間と推定されているが、注目すべきことは、この集落の中央はいつも広場としてあけられ、長径五十メートルを超える石皿がおかれていた。この石皿は、採集した木の実類をすりつぶす道具であろう。広場はそうした作業のための共同広場であろう。

集落の拡大は、横浜市港北ニュータウンの遺跡で、一層明瞭となる。例えば、緑区大熊仲町遺跡（おおくまなか）は、縄文中期の竪穴住居跡が全部で百六十八戸、墓壙（ほく）を含めた土壙百四十墓が発見され、別に縄文早期の条痕文土器を残した

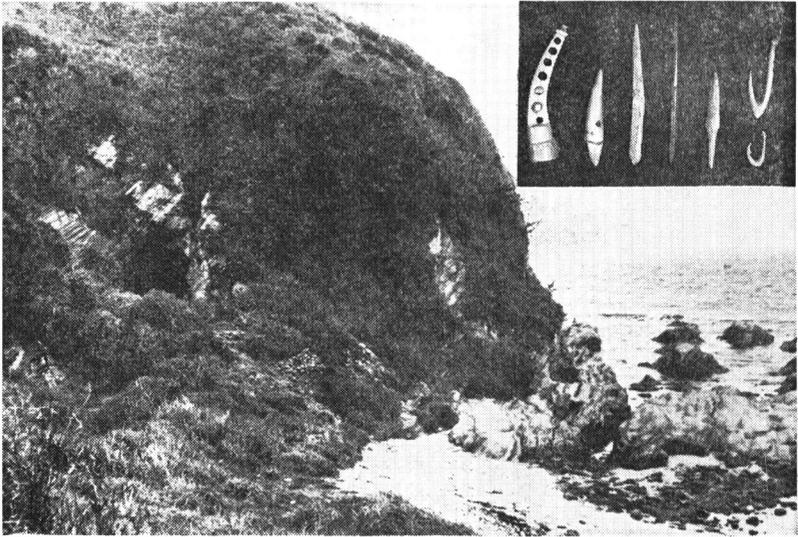


竪穴住居集落址 横浜市緑区港北ニュータウン

竪穴住居跡五戸、炉穴が百二十五基も発見されている。もちろんこれらがすべて同時期に存在したのではないにしても、中央には広場があつて、戸数の増加につれて、周辺から広場に向かって住居が増設されている。この中で、加曾利EII期かそりに属する住居跡には、直径五十以上の広場の一角に、長径十・五以上だえん前後の楕円形、または長方形

の墓壇が、ほぼ円形をなして群在している。楕円形は、住居跡にもみられ、その長径は、十五以上も及ぶ。集会所か倉庫か作業場か、その用途ははまだ明らかでないが、中央広場と共に住民の社会的集合の場所であろう。墓地の出現とともに、人間意識の発展とみなければならぬ。

県下の縄文時代に、一万年に近い歳月が流れた。その間、人々の生活は、依然として採集経済に依



大浦山洞穴遺跡と骨角器 三浦市

存していたが、弓矢と土器の発見によって、採集の範囲は拡大され、煮沸のできる土器は、魚貝類の食糧化を爆発的に拡大し、やがて、骨製の釣針、錘をつけた魚網・丸木舟による海洋漁撈にまで発展、弓矢の発見と家犬の飼育は、動作の早い小動物、さらには空とぶ鳥さえも、食糧化することを可能とした。しかし全く自然採集のため、濫獲による獲物の減少、寒冷気温や天災などのための木の実の不熟等による食糧不足のため、その一生の間には、数回も栄養失調に見舞われることも、経験しなければならなかった。

(二) 日本人の原点

稲と鉄の伝播 と弥生文化

貝塚だけでも三百か所を数える県下の縄文遺跡も、縄文末期には、その遺跡は十か所程度に、急速に減少する。この減少ぶりは、関東の他の地域

に比較しても、目立つものである。その原因は、縄文時代後期以降に新期富士山の火山活動で、大量の火山灰が降り、動植物の生息に大きな影響を与え、これらを食糧資源とする県域の縄文人の生存に深刻な結果を生んだものと推測される。

しかし、県域の縄文人が絶滅したわけではないし、火山活動がおさまると、隣接地域から県域に移る人々もあろう。そのころ、列島には、最初にそれが発見された東京都文京区弥生町の名をとって、弥生式土器とよばれる土器の発生と、稲と鉄の伝来があつて、県域の文化は再生発展した。紀元前三世紀のころである。この土器の使用は、紀元三、四世紀までつづいた。縄文時代に比べれば、はるかに短い期間であるが、列島に住む人間社会に与えた影響は大きく、今日の日本人の出発点となつた。

縄文文化を象徴する縄文土器は、亀ヶ岡（青森県）遺跡の土器を標式とする亀ヶ岡式土器に至つて、装飾の極致に達したが、弥生式土器は、ほとんど装飾のない、極端に簡素なことが特徴で、明らかに異質的文化である。この文化は、西日本からひろまつたもので、県下では津久井町中野大沢遺跡、横浜市緑区霧ヶ丘遺跡などから東日本では初期の弥生土器といわれる水神平式土器が出土した、つづいて津久井町三ヶ木の縄文後期の敷石住居跡から、南関東で最も古いといわれる弥生式土器が出土し、これに似たものが南足柄市関本出口遺跡・山北町堂山遺跡・平塚市遠藤原遺跡・秦野市同明遺跡、横浜市金沢八景駅付近の遺跡などから発見されて、次第に県下全域に及んだことを示している。注目すべきは、これらの段階では、後期縄文土器と共存していることである。これ



三殿台遺跡の復元家屋 横浜市磯子区

は県下の縄文人が、弥生文化を受容して、新しい時代に入つたことを示す。

定住集落の発生

やがて、人々を縄文文化と訣別させる農耕生活がはじまる。同時に集落の定住化

がすすみ、規模は飛躍的に拡大する。小田原市谷津遺跡・逗子市持田遺跡・三浦市赤坂遺跡・横浜市磯子区三殿台遺跡・同港北区大塚遺跡などは、その大規模な集落跡として知られている。三殿台遺跡では二百以上の住居跡が発掘された。その他の群小の遺跡は百か所以上といわれ、それらの大部分は、農耕（特に水田稲作）を営む集落跡で、沖積地をひかえた台地上に存在する。この典型的な一例に横浜市港北区大塚遺跡をあげよう。この遺跡は、全国的にもまれな完全な集落址の遺跡である。鶴見川の支流早淵川にのぞんだ標高約五十メートルの平坦な台地上にある堅穴住居址群にぐるりと濠をほりめぐらした環濠集落で、環濠内の住居跡九十七戸、このうち九十戸

1 人間の痕跡



大塚遺跡（環濠集落）とそれともなう方形周溝墓群（歳勝土遺跡）横浜市港北区

は、すべて同時代ではあるが、二十五戸ないし三十戸の集落が、数回にわたって形成されたものである。各戸は、壁にそって壁溝とよばれる細い溝をめぐらし、床面には規則的に並ぶ四本の柱穴、炉跡、出入用の梯子はしどをかいた梯子穴がある。堅穴の周囲には、堅穴から掘り出した土を盛った土堤をめぐらしている。地表を流れる水の流入を防ぐためである。床面からの堤の上端までは一尺以上の差があり、出入りに梯子が必要なのである。

集落をめぐる濠は、幅平均五メートル、深さ二メートルで、掘り出した土を濠の内側に積み上げてている。この濠は、外部からの敵の防禦を目的としたものであろうか。石鏃・石錐が、鳥獣以外に人間同志の殺戮にも用いられるようになったのは、すでに前時代のことであろうが、農耕によつて集落が定着した弥生時代には、耕地や貯蔵された収穫物の争奪もはげしさをましたことを物語るものであろう。

この大塚遺跡から約八十メートルはなれてある歳勝土遺跡は、二十五基の方形周溝墓の遺跡で、大塚遺跡の集落に付随したものと推定される。この墓は、四本の溝を方形に並べ、掘った土は溝の内側に盛り上げ、中央に土壙を作つて死者を葬つたものである。この方形周溝墓は、九州から東北地方にかけてひろく見られるが、その最も古いものは、畿内地方で見られるので、これも弥生文化の一部として西方から伝わったものであろう。

弥生文化には、鉄の伝播がある。いまだ石器が主要な道具であったが、鉄の伝播によつて日本人は、石器時代と訣別する。三浦市赤坂遺跡・同雨崎洞穴・川崎市高津区神明上遺跡から板状の鉄斧が発見されるなど、神奈川県域もその例外ではない。

(三) 毛人国の成立

集落が小国 ちようど、紀元前一世紀ごろ、列島の様子を伝えた中国の史書に、倭は山島に拠^よつて、百余国に
を形成する 分かれていると伝えている。この記事が東日本のどこまでの状況をのべているのかは明確でない

にしても、日本列島にも、首長の支配する集落が、小国の形をとり出したことを伝えるものであり、やがてこの
小国は、四世紀ごろになると、ヤマトに成長したヤマト王権によって、統一された。そのさまを、西暦四七八年
倭王武^{わおうぶ}（雄略天皇）は、当時の中国皇帝に次のように報告している。

昔から祖禰^{そでい}（先祖）が、躬^{みづか}ら甲冑^{かちゆう}を撰^{つらぬ}いて、山川^{せんせん}を跋^{ぼつ}渉^{じやう}し、寧^{ねい}抛^{じよ}（身を休める）の違^いもなく、東^{とう}は毛人^{もうじん}を征^{せい}すること五十
五国、西^{せい}に衆夷^{しゆい}を服^{ふく}すること六十六国、（海^{うみ}を）渡^{わた}りて海北^{かいほく}を平^{たい}ること九十五国であります。

東・西・北は、ヤマトを中心にした方角であり、海北九十五国は、朝鮮半島の国々であるので、これを除け
ば、ヤマト王権が征服した列島内の国は百二十一か国となる。この数字は、多少の文飾はあっても、実数とかけ
はなれたものではない。古代にヤマト王権が、東国とよんだのは、今日の福井・岐阜・三重の三県以東の地域で
あり、わが神奈川県もその中に含まれる。毛人は「日本書紀」では、蝦夷^{あまひ}を表わす文字に充てられていること
は、注目されよう。



三角縁神獣鏡 平塚市真土大塚山古墳 東京国立博物館蔵

の鏡が、地方の首長の墳墓から発見されたことは、ここに葬られた首長が、西日本に成立したヤマト王権から、その権威のシンボルである鏡の賜与をうけて、自らの権威を強化したことを意味すると考えられる。

こうして東国が、ヤマト王権下に入る有様は、県下の古伝承である日本武尊やまとたけるのみことの東征説話として伝えられている。

今日、古墳時代の代表的な高塚古墳は、ヤマト王権の地方に伸展する象徴とされているが、相模・武蔵の地に古墳がつくられ始めたのは、畿内地方よりも少しおくれて、四世紀中ごろ以後と考えられている。中でも古いとされる古墳に平塚市真土大塚山古墳がある。この古墳は現在はその姿を残さないが、その痕跡から前方後方墳と推定され、多数の遺物が発見された。その中に椿井大塚山古墳（京都府）出土と同じ鑄型で鑄られた三角縁神獣鏡からんじゆうきょうが加わっていた。この同じ鏡は、川崎市幸区加瀬白山古墳かせはくからも発見されている。この古墳は、全長八十七メートルに及ぶ巨大な前方後円墳である。この三角縁神獣鏡は、中国には見られないので、日本で鑄造されたとする説が有力であるが、こ

1 人間の痕跡

県下の主要古墳

	前期 (4世紀)	中期 (5世紀)	後期 (6世紀)	終末期 (7世紀→)
酒匂川 流域			○諏訪の原古墳群	→ ○関本古墳群 ○塚原古墳群
相模川 流域	真土大塚山古墳 *秋葉山1号墳	*地頭山古墳 *秋葉山2号墳 *秋葉山4号墳 *ひさご塚古墳 及川古墳 岡津古久1号墳 *大神塚古墳	●登山古墳 ○三ノ宮古墳群 ○堂坂古墳群 *二子塚古墳 *塚越古墳 *十二天古墳 ○石神古墳	楊谷寺谷横穴群 庄ケ久保横穴群 ○上依知古墳群 ○桜土手古墳群 ○釜口古墳 甘沼横穴群 篠谷横穴群 谷ケ原古墳群 新林横穴群 梨ノ木坂横穴群
三浦半島			●向ヶ崎古墳 ●蓼原古墳 *大塚山古墳	稲村ヶ崎横穴群 新宿横穴群 長浜横穴群 かろうと山古墳
横浜南部		*上矢部古墳	*瀬戸ヶ谷古墳 ● * ○軽井沢古墳 ○室ノ木古墳	宮ノ前横穴群 七石山横穴群 中村町横穴群
鶴見川 流域	*稻荷前6号墳	*稻荷前1号墳 *朝光寺原1号墳 カネ塚古墳	* ●駒岡古墳 ○稻荷前古墳群 * ●杉沢古墳 ○ ●岩瀬横穴群	市ヶ尾横穴群 → 矢崎山横穴群 →
多摩川 流域	*加瀬白山古墳 *観音松古墳	●日吉矢上古墳 了源寺古墳	○日吉古墳群 ○第六天古墳 ○夢見ヶ崎古墳	○馬網古墳 下作延横穴群 井田横穴群 西前田横穴群

古墳の時期については、推定の範囲にとどまるものが多い。
 →は以後の時期にも及ぶと思われるもの。 *印は前方後円(方)墳。
 ●印は埴輪の出土している古墳。 ○印は横穴式石室を有するもの。

二 大化の改新と相武

(一) 杖刀人の首

杖刀人の首

埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣の金象嵌の銘文は、東国にとつても、わが国にとつても現存する最古の記録であり、倭王武の上表文を内側から裏付けるものである。銘文は、漢字で金象嵌されて

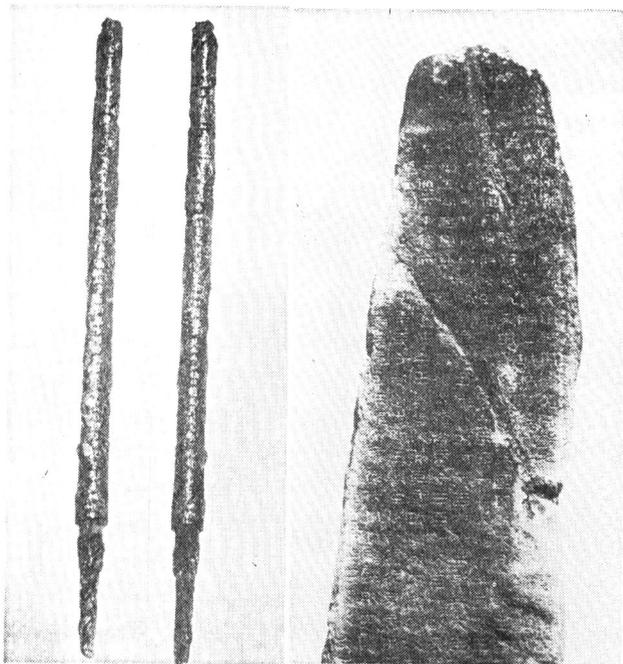
いるが、これを訓み下しにすると、表に、

辛亥の年七月中に記す、乎獲居臣の上祖、名は意富比埜、其の児、多加利足尼、其の児、名は亘巳加利獲居、其の児、名は多加披次獲居、其の児、名は多沙鬼獲居、其の児、名は半亘比、

裏に、

其の児、名は加差披余、其の児、名は乎獲居臣、世々杖刀人の首と為りて、事え奉り来り、今の獲加多支齒の大王の寺、斯鬼宮に在す時に至る、吾、治天、下を佐け、此の百鍊の利刀を作らしめ、吾、事え奉る根原を記す也。

と読める。文中のワカタケルの大王は、名をオオハツセワカタケルと称した雄略天皇を指すことは疑いない。辛亥の年は、年号のない古代に干支で年をあらわしたもので、雄略天皇ごろの辛亥の年は、西暦四七一年にあた



稲荷山鉄剣

埼玉県

広開土王碑

中国輯安県

る。この年に、オワケノオミが、その祖オオヒコ以来七代にわたって、代々杖刀人の隊長となつて、現在の大王に至るまで仕えて来たとのべている。杖刀人は、大王の親衛隊のことで、初代のオオヒコは、日本書紀の、崇神天皇十年九月に、北陸に派遣された四道將軍の大彦命とその名が一致する。崇神天皇は、日本書紀にハツクニ

シラススメラミコトと謂うとあつて、ヤマト王朝の創始者と考えられている。劍銘のオオヒコ同一人であるとするのは、なお検討を要するが、少なくとも雄略天皇のころには、東国の豪族が、杖刀人を率いて王権の親衛隊をつとめた事実を否定することはできない。

稲荷山古墳は、北武蔵にあるが、この古墳の主の支配は、わが県下にも及んでいたと考えられる。

国造と屯倉

ヤマト王権は、地方の首長をその勢力下におくと、その国造に任じて、支配させた。県域には、相武国造・師長

国造・武蔵国造の三国造が任命された。相武国造は「国造本紀」には、成務天皇の世に、武刺国造の祖伊勢都彦命の三世の孫、弟武彦命が国造に定められたとし、師長国造は、茨城国造の祖建許呂命の子宮富鷲意弥命が国造に定められたとしている。いずれも県外から任命を伝えていることは注目に価する。相武国造の国は、後の高座郡・愛甲郡あたりで、相模川中流以上の地域と推定され、日本武尊の伝説にあらわれているような、ヤマト王権に抵抗した土着の豪族が亡ぼされてのちにおかれたものであろう。寒川神社は相武国造の祀つた神社であろう。また師長国造は、後の余綾郡磯長郷を中心とした県西部を占め、級長津彦命を祀る川勾神社はその宗社である。武蔵国造は、現在の埼玉県・東京都の地域を主要な支配下とする国造であることは言うまでもないが、これには若干の説明が必要である。

「国造本紀」には、武蔵の国造に、無邪志国造・胸刺国造・秩父国造の三国造をあげているので、通説では、前の二国造を重複したとしているが、恐らくこれは、次に述べるムサシ国造家の分裂を反映したものであろう。ムサシ国造家の内紛は、安閑天皇の治世と伝える。武蔵国造笠原直使主と同族の小杵とが、国造の地位を争って、長年解決しなかった。小杵は大王（ヤマト王権）に従わず、ひそかに上毛野君小熊の援助を得て、使主を殺そうと計画した。使主はその謀略を知って、武蔵を逃げ出し、京にのぼってその状況を大王に告げた。大王は、小杵を誅し使主を国造とした。分裂していた国造はここで一本となり、使主は、喜んで横停・橘花・多氷・倉櫛の四か所を、屯倉として大王に奉った。屯倉は、大王家の直轄領である。横停屯倉は埼玉県吉見町・東松山市あた

り、橘花屯倉は神奈川県下の川崎市中原区住吉・横浜市港北区日吉あたり、多氷は多末の誤りで多摩郡（東京都）、倉櫛は倉樹の誤りで、横浜市港南区・磯子区・金沢区あたりとするのが通説である。笠原使主が献上したこの四屯倉は、敵方の小杵の旧領であつたと考えられ、その支配区域は、武蔵国の西部と南部にひろがる丘陵地帯であつたと想定される。これ以後、現在県域となっている武蔵地区は、天皇直轄領となつたことになる。

屯倉は、はじめはこれを献上した国造が田部を使つて経営したが、やがて大王家から田令が任命され、大王家の性格を一層たかめた。しかし東国の屯倉の設定は、西国に比べるとはるかに少ない。その代わり大王家の私民である御名代部・御子代部・私部や壬生部が、東国には圧倒的に多い。このうち相模地区では、壬生部が有力で、後世に、この壬生部の管掌者である壬生直が相模国造となつたり、郡大領（郡の長官）になつている。

(二) 大化改新

東国に始まる新体制 こうした東国に天皇家の支配が他地方に比べて進んでいたことから、天皇を中心とする中央集権体制をうちたてようとした大化改新政治は、まず東国から実施されることになつた。

大化改新政治の正式の発足は、大化二年（六四六）正月、難波長柄宮（大阪府）で宣布された改新の詔であるが、その前年八月に、まず八人の国司を東国に派遣して、作業が始まつている。この国司には、四つの任務が与